

令和4年度 全国学力・学習状況調査結果の分析

山北町教育委員会

令和4年度全国学力・学習状況調査が、令和4年4月19日に全国の小学校6年生及び中学校3年生の全児童・生徒を対象に実施されました。

この調査は、児童・生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的にしています。

その結果が、8月に文部科学省から送られました。学校は、教科ごとに児童・生徒一人ひとりに個人票を返すとともに、全体の結果を分析したうえで指導と改善に努めています。

【教科に関する調査】

教科による内容項目において県公立学校と比較したところ、良好な点及び課題点は次のとおりでした。なお平均正答率では、中学校国語は県平均と同程度、数学、理科においてはやや低い状況でした。小学校では国語、算数、理科において県平均と同程度の状況でした。

《小学生》

○国語 話し手と聞き手の間に好ましい関係を築き、継続する働きが言葉にはあることや登場人物の行動や気持ちなどについて叙述を基にとらえることなどの問題は、高い正答率でした。友だちの意見の良さを認め、自分の考えを広げていく話し合いの実践や複数の叙述を基に登場人物の気持ちを捉える授業づくりの成果が表れています。その一方で、条件に応じて文章でまとめたり、表現したりする問題に無回答が目立ち、「書くこと」に課題がみられました。

○算数 整数の乗法の計算や最小公倍数、最大公倍数の意味についてはよく理解ができていました。また、伴って変わる二つの数量が比例の関係にあることを用いて、未知の数量の求める問題についてもよくできていました。一方、日常生活の具体的な場面と対応させながら考察する割合に関する問題では、生活経験を基にした判断と計算結果の関連付けについて戸惑っている様子が伺えました。

○理科 観察や実験などの結果の傾向を捉え、分析して、解釈し、自分の考えをもつ問題については、高い正答率でした。一方で、実験器具の正しい名称や同じ実験を行ったにもかかわらず他のグループと違う結果になった場合や複数回行った実験結果のばらつきが生じた場合などについて、その要因を見だし、実験方法を再考する問題に関しては課題がみられました。

《中学生》

○国語 行書の特徴を理解して書く問題では、楷書と比べ、行書では、形が丸みを帯びる場合があることや点画が連続したり省略されたりすることがあること、筆順が変化する場合があることなどの特徴をよく捉えていました。一方、文学的な文章について、文章中の時間的、空間的な場面の展開、登場人物の相互関係や心情の変化などの注意深い読み取りに課題があります。また、記述問題に未回答が目立ち、自分の考えをまとめて書くことに課題があります。

○数学 ある事象について、予想した事柄が常に成り立つかどうかを判断するために、常に成り立つとは限らないことを説明する反例の意味についてよく理解していました。仮定は満たしているが結論は満たしていないという視点などの多様な考えを大切に日々の授業の成果が表れています。一方で、複数の集団のデータの分布に着目し、その傾向を比較して読み取る問題や証明の根拠として用いられる図形の合同条件についての理解に課題がみられました。

○理科 日常生活の動作の中で発生する静電気の性質により引き起こされる現象や静電気を利用したものをその性質と関連付ける問題や観測データと天気図を関連付け、天気の変化を分析して解釈する問題では県平均より高い正答率でした。一方で、動物の体のつくりと働きについて、外部形態や生活場所と関連付け、共通点や相違点に着目して考察を行う問題などの「生物」分野で課題がみられました。

【児童・生徒質問紙調査】

生活面や学習面に関する質問が 69 項目で行われました。全体として小・中学生ともに、「学校に行くのは楽しい」と答えている児童・生徒が多く、学校生活を前向きに捉えている様子が見られます。また、ほとんどの児童・生徒が「いじめはどんな理由があってもいけない」と考えており、人権意識の高さが伺えます。小・中学校ともに、友だちと協力するのは楽しいと感じている児童・生徒が多く、学校における仲間との協働的な学びの姿が表れています。

令和 4 年度より推進している「0 歳から 15 歳までの一貫教育・保育」で大切にしている「自己肯定感」に関わる質問では、「自分にはよいところがあると思いますか」に対し、多くの児童・生徒が肯定的な回答をしています。また、「非認知能力」に関わる質問の「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしていますか」に対しては、小・中学校ともに多くの児童・生徒が肯定的な回答をしています。こうした「自己肯定感」や「非認知能力」に関わる育ちは、小・中学校だけでなく、乳幼児期からの取り組みが大切であり、園・小・中の連携をさらに深めていく必要があります。

ICT 機器の活用については、「学習の中で PC、タブレットなどの ICT 機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」に対し、多くの児童・生徒が役に立つと捉えており、ICT 機器の授業での積極的な活用と活用方法について考えていく必要があります。

家庭生活では、テレビやゲーム、学習以外のスマートフォンの使用等に費やす時間が多く、読書や学習の時間が少ない傾向にあるようです。また、中学校では、「スマートフォンやコンピューターの使い方について、家の人と約束したことを守っていますか」という質問に対し、「約束自体がない」と答えた生徒が多く、情報モラルやルール等について学校と家庭の連携を強めていく必要があります。

【今後の取り組み】

- ①小・中学校の教職員が、互いの教育・保育についてのより深い理解と子どもたちにどのような力がついていたのかという視点で検証し、授業改善に取り組みます。
- ②園小中一貫した教育・保育をめざし、発達段階に応じた「子どもの姿」を共有するとともに、学びの連続性を大切にされた教育・保育に努めます。
- ③学習や読書の習慣化のために、家庭学習の重要性について再認識し、学校全体で共通理解を図って取り組みます。
- ④主体的・対話的で深い学びを進めるために、ICT 支援員等との連携をとおして、ICT 機器の効果的な活用方法について検討します。
- ⑤仲間の意見を認め、自分の考えを表現する場の設定と学び合うことのよさを実感できる授業づくりにより一定の成果が見られます。今後も話す力、聞く力を育成するとともに、自分の考えを「書くこと」などの表現方法でまとめる力を育てます。